

マルクス経済学（マルクス主義）導入時の検討

——日本マルクス経済学史 I——

深 澤 竜 人

開題

本誌の前号でも詳述したが、日本の経済学はいわゆる「近代経済学」とマルクス経済学の二派が並立してきた。日本における経済学のこのような並立・併存状況は、他の資本主義国からすれば極めて珍しい状況であった。本稿以下では表題のとおり、日本にマルクス経済学（マルクス主義）が導入されてくるその要因と状況を探りながら、同時にまたなぜ日本において「近代経済学」とマルクス経済学がこのように併存し、あるいは対立状況が存在し続けていたのか、またはなぜ資本主義経済の国でありながら日本においてはマルクス経済学が盛んなのか、これらを究明していくこととなる。

その前にまず次の点について断わっておきたい。他国には第一マルクス経済学に対抗する意味で「近代経済学」なる用語を使用することはない。「近代経済学」(modern economics) と言えば、広く近代あるいは現代の経済学という意味合いで、日本のように非マルクス経済学、またはマルクス経済学に対置する経済学という意味で「近代経済学」なる用語を使用させることはあまりない⁽¹⁾。

若干本稿と関係する限りで、ここで経済学の導入状況とその後の推移を概観しておくとするば、日本においてマルクス経済学が興隆したのは、戦前においては日本資本主義論争の頃（1920～30年代前半）であった。日本ではこの論争において、マルクス経済学の理論面での発展や、あるいは数々の重要な史実が明らかにされ、斯学の学術的水準は大いに引き上げられた。だがこれらの論者の多くは、戦争の拡大とともに捕えられ、論争は葬られた。同時代を生きた大内兵衛（1888～1980年）はこれを、ファシズムに抗しながら凋落していったと表現している⁽²⁾。しかし戦後、学者・研究者が復帰し、民主化への潮流などにもよって、再びマルクス経済学は活性化する。ただその後の日本の経済学は、いくつかの要因から「近代経済学」への重点移動が進んでいった⁽³⁾。

「近代経済学」に関して外観すると、「近代経済学」は上記の日本資本主義論争の頃と同時期に日本に輸入され、その展開は当時の日本資本主義論争ほど華やかなものではなかった。日本で「近代経済学」が本格的に興隆し出したのは、戦後になってからである。そして1955年以降になると、「近代経済学」とマルクス経済学この二つの

並立あるいは対立が明確となっていった⁽⁴⁾。ただその後の「近代経済学」の発展と、特にそれを駆使した日本経済の研究の発展は、目を見張るものがあった⁽⁵⁾。『経済白書』などをはじめとする政府刊行物等々は（その他多くの研究書も）、ほとんどが「近代経済学」的方法となっていった。

このようにして日本の経済学は「近代経済学」への重点移行が見られたのであるが、とはいえ片やマルクス経済学における発展も決して少なくはない。マルクス経済学的な観点に立った日本経済の研究は積み重ねられていったし、それはまた現在でも行なわれている。ただマルクス経済学の凋落にとって大きな影響を与えたものとして、やはり1880年代後半から90年代にかけての社会主義経済圏の激変があり、その顕著な例としてソビエトは解体した。これは世界的かつ歴史的な激変であったため、日本のマルクス経済学界には少なからずの影響を与えたことであろう。そうでなくとも、このような社会主義経済圏の激変や崩壊を受けて、マルクス経済学に対する揶揄にも似た批評・酷評は、巷間において聞かされるところでもある。先の大内兵衛の言を文字って言えば、「マルクス経済学は戦後は以上のような動向に抗しながら凋落していった」となるのであろうか。

このように日本の経済学史を概観すると、なぜ日本においてマルクス経済学が興隆してきたのかとの疑問がまず初発において湧いてくる。本稿はその解明に焦点を当てていくこととする。が、しかしそれには非常に長稿を要するであろうから、本稿ではもう少し対象と時期を絞り、明治維新後の日本の経済学の歴史から見ていきたい。そこでなぜマルクス経済学が導入され出し、マルクス経済学はいかなる点で当時の知識人を引き付けていったのか。その引き付けていったものとは何であったのか。これらを見ていくこととする。このような問題の解明は、従来の学説史研究にとって希薄であったとの指摘もある⁽⁶⁾。またこうした取り組みが取りも直さず、マルクス経済学の今日的興隆の一端をなすと考えられるところでもあり、さらに同時に冒頭で述べたように日本における「近代経済学」とマルクス経済学との併存・対立関係の解明の一端にも関与していくと考えている。

さらに言えば、現在我々はここに至ってもう一度原点に立ち帰って、日本における経済学の歴史として、マルクス経済学の導入から、展開、発展、そしてその後と、こうしたプロセスを整理していく必要があるとの考えに筆者は立っている。先人たちはまずいかなる要請に導かれてマルクス経済学の導入の必要性に駆られたのか、そしてマルクス経済学はそれに応えるべきいかなる要素があったのか、何をマルクス経済学に求めたのか。またマルクス経済学はその解決にどこまで迫ったのか。本稿以下はこれらに迫っていくこととする。

1. 日本における経済学の展開（古典学派から歴史学派への移行、社会主義思想の萌芽）

ここでは日本の経済学の歴史を初発から遡って見ていきたい。初発と言っても、江戸時代のものは一応おくとして、明治維新後から追っていくこととする⁽⁷⁾。（本稿の事項と関係する歴史的事件、あるいは経済学の主要著作、またその輸入などを含めた「関連年表」〔明治維新时期から1910年代まで〕を作成したので、以下それを参照。）

関連年表

年	元号	事項	
		【日本】	【他国】
1867	慶応3年		マルクス『資本論』第1巻初版
1868	明治元年		
1869	2	版籍奉還	
1870	3	永田健助訳述『宝氏経済学』 加藤弘之『真政大意』	フォーセット『初学者のための経済学』
1871	4	廃藩置県	ジェヴォンズ『経済学の理論』 メンガー『国民経済学原理』
1872	5		ドイツ社会政策学会設立
1873	6		
1874	7	地租改正	ワルラス『純粹経済学要論』
1875	8	林薫・鈴木重孝訳述『弥児経済論』（ミル『経済学原理』）	社会主義鎮圧法（ドイツ）
1876	9		
1877	10	大島貞益訳『人口論』	
1878	11	西周「社会党論ノ説」（1878～79年頃）	
1879	12		
1880	13		エンゲルス『空想から科学へ』
1881	14	松形財政始まる 小崎弘道「近世社会党ノ原因ヲ論ズ」	
1882	15	東洋社会党結成	
1883	16	『富国論』（スミス『国富論』～84年） 車会党（しゃかいとう）結成	マルクス没
1884	17		
1885	18		『資本論』第2巻
1886	19	雨宮製糸場（日本初の）ストライキ	
1887	20		

1888	21	松岡好一「高島炭坑の惨状」『日本人』	
1889	22	帝国憲法発布 大島貞益訳『李氏経済論』（リスト『経済学 の国民体系』）	第二インターナショナル
1890	23	1890年（日本初の）恐慌	
1891	24		
1892	25	社会問題研究会発足	
1893	26	草鹿丁卯次郎 [1893]「史伝『カル、マルッ クス』 Kare Marx」 民友社編『現時之社会主義』	
1894	27	日清戦争 グラハム（森山信規訳）『新旧社会主義』	『資本論』第3巻
1895	28		エンゲルス没
1896	29	社会政策学会設立	
1897	30	労働組合期成会設立 田嶋錦治『日本現時の社会問題』 藤井準造『近世社会主義』	
1898	31	社会主義研究会創設	
1899	32	社会政策学会設立趣意書公表 高島炭坑事件 村井知至「カール、マルクスの社会主義」 横山源之助『日本の下層社会』	
1900	33	治安警察法 社会主義協会発足	
1901	34	社会民主党結成 足尾鉍毒事件 幸徳秋水『帝国主義』 片山潜「『ダスカピタル』と其著者マルクス の地位」	
1902	35	幸徳秋水「社会主義対する誤解」 西川光次郎『人道の戦士、社会主義の父、 カール・マルクス』	
1903	36	幸徳秋水「社会主義と宗教」 幸徳秋水「社会問題の帰趣」 幸徳秋水『社会主義神髄』 片山潜『我社会主義』	
1904	37	日露戦争（～05） 幸徳秋水・堺利彦訳『共産党宣言』	
1905	38		
1906	39	堺利彦訳『空想から科学への社会主義の発展』 日本社会党認知	

1907	40	山川均「マルクスの『資本論』」 堺利彦・森近運平『社会主義要綱』	
1908	41	山路愛山「現時の社会問題及び社会主義者」	
1909	42	安部磯雄『資本論』の部分訳	
1910	43	大逆事件	
1911	44	工場法発布	
1912	大正元年	友愛会設立	
1913	2		
1914	3		
1915	4		
1916	5		
1917	6		ロシア革命
1918	7	米騒動	
1919	8	松浦要訳『資本論』、生田長江訳『資本論』 川上肇訳『賃労働と資本』 松浦要・山川均訳『賃金・価格および利潤』	

①古典派経済学から歴史学派への移行

事前確認事項だが、坂本武人氏の指摘に拠ると、当時日本に入ってきた欧米の社会思想は、大きく四つの流れに分けることができる⁽⁸⁾。スミス・リカード・ミルなどのイギリス功利派、ルソー・ヴォルテール・モンテスキューなどのフランス自由派、ビスマルク・スタインなどのドイツ国権派、そしてアメリカ・キリスト教派である。この中で日本において最も早く取り入れられたのが、個人主義・自由主義を根底にしたイギリスの思想であり、それがやがてドイツの国権派・国家主義的なものへと代っていく。片や、アメリカ・キリスト教的な思想も入って、これが自由民権運動と結びついて、日本の社会主義思想の源流になっていく。これらのことは本稿の以下の論述で再確認できるはずである。

そこで経済学に限って見ていくと、日本において経済学は初期には輸入の学問であり、明治維新後の文明開化と同時に先進資本主義国のものが盛んに輸入されるようになった。その系統は、初期には上記「関連年表」で見られるようにほとんど手当たり次第というほどの乱雑さで輸入され翻訳されたが、中でもイギリス・ドイツ（オーストリアを含む）が多くを占めている。しかし重要な点は、学派的に徐々にイギリス古典派経済学（自由主義経済学）のものから、上記のようにドイツ歴史学派のものへと重点移行が見られる点である。

この古典学派から歴史学派への変遷あるいは転換の契機は、一般的には1881年の大隈重信の下野（明治14年の政変）に求められている。大隈は政府部内で国会開設・憲法

制定について急進的であって、またイギリス自由主義の傾向を持っていた。こうした意向は政府中枢部から追われ、代わって伊藤博文・井上毅によって日本の学問・教育にはドイツ国家主義の色彩を強める方針が進められたのである。お雇い外国人の多くはドイツから招かれたり、この時期東京大学の文・理学部では英語とともにドイツ語が必須科目とされている。

教学のこうした基本線から、後にドイツの大学で経済学を学んだ留学生（和田垣謙三・高野岩三郎・山崎佳次郎・福田徳三）が帰国し、彼らの影響もあって日本の経済学にはドイツ新歴史学派の影響が強くなった。それを象徴するかのように、ドイツ新歴史学派の社会政策学会に倣った日本社会政策学会が1896年に発足し、1907年から年次大会を開催していく。（この時の「設立趣意書」〔1899年〕を後に参照。）

②社会問題・経済問題の発生

古典学派から歴史学派への移行には、上記のような政治的な動きからの影響が大きく作用したことの他に、以下の要因も大きく関与していた。日本においても資本主義化の進展によって、今までにない様々な社会問題・経済問題が発生してきたのである。この点を見過してはならない。

例えば、日本のこの頃の女工の惨状やまた下層社会の状況は、『女工哀史』（1899年）や『日本の下層社会』（1925年）に縷々述べられているのは周知のとおりである。しかしそれが刊行される前に、すでに労働問題、社会問題は発生していた。例えば、1886年に日本で初めてのストライキとしての有名な「雨宮製糸場ストライキ」が山梨県甲府市で起き、また松岡好一の「高島炭坑の惨状」が雑誌『日本人』に掲載されたのが1888年である。1890年には日本初の経済恐慌が発生した。

つまり日本が資本主義化への道を進みながら、今までの封建体制また農村社会とは違った資本主義的な賃労働あるいは会社経営という形態が発展する中で、資本主義に特有の問題が発生し出したのである。こうした問題に対しては、一面従来の古典学派や自由主義経済学のものをもってしては解消・解決され得ないと考えられ、そこで例えば遅れて資本主義化したドイツで生まれた歴史学派的な要素、または社会政策的な方法を取り入れなければならないと考えられるようになったのである。

③社会主義的な思想・運動の萌芽

こうした動きと同時にこの頃、社会主義的な思想・運動も日本において芽生え、あるいは移入されてくる。日本における社会主義的な思想・運動の源流は、既述のとおり自由民権運動とキリスト教社会主義に求められるのが一般的な見解となっているが、この頃次第に日本における社会主義思想・運動が、その自由民権運動やキリスト教社会主義から脱皮した存在を明らかにし、関連の団体が創設され出してくる。例え

ば、1892年に社会問題研究会が発足、これはやがて1898年に社会主義研究会となり、1900年には社会主義協会となる。労働組合の面でも、1897年に労働組合期成会が結成されている。

ただここで注意することは、このような動き・運動はまだマルクス主義的、あるいはマルクス経済学的な学問的裏付けによるものではないという点である。本稿の後に見るように、マルクス主義あるいはマルクス経済学の本格的導入・移入は、時期的にももう少し後で1900年代に入ってからのことである。

さてしかし、ここで本稿の第一の対象課題を提起したい。当時において社会主義あるいはこうした社会主義的な運動・動きを、この時代の知識人や在野の人たちは一体どのように見ていたのかである。それについて節を改めて検討していくこととする。

2. 社会主義の紹介と批判

①明六社の論者の理解と主張

上記の課題に接近していくためには、時期的には再び明治維新の頃までさかのぼりたい。まず明治維新・文明開化という日本の近代の初期、あるいは社会主義が導入・移入されてくる当初、当時の知識人、いわゆる啓蒙思想家たちは社会主義を一体どのように見ていたのであろうか。

加藤弘之『真政大意』1870年

社会主義思想についての言及で一番早いものは、1870年の加藤弘之『真政大意』であって、当時、西洋事情の啓蒙に努力していた加藤弘之は社会主義について次のような記述と紹介を行なっている。

「既ニ欧州ニモ往古希臘ノ盛ナ時分。之ニ類シタ制度モアリ。又其後ニ至リテハコムミュスメジャノ。或ハソシアリスメ杯申ス。二派ノ経済学ガ起リテ。二派少々異ナル所ハアレドモ先ズハ大同小異デ。今日天下億兆ノ相養生スル上ニ於テ。衣食住ヲ始メ都テ今日ノ事ヲ何事ニヨラズ。一樣ニシヨウト云ウ論デ。元来此学派ノ起リタ所以ト云フモノハ。天下人民ヲ各々勝手ニ任セテ置テハ。其才不オト勤惰トニヨリテ。大ニ貧富ノ差ヲ生ジテ。富者ハ益々富ミ貧者ハ益々貧シクナリ。就テハ四海ノ困窮モコレヨリ生ズル事ジャカラ。今日衣食住ヲ始メ。其外私有ノ地面器物及ヒ産業等ニ至ル迄。都テ人々ニ任セル事ヲ止メ。各人ノ私有トイウモノヲ相合シテ。悉ク政府デ世話ヲヤイテ右ノ如ク貧富ノナイ様ニシヤウト云フ。所謂救時ノ一法デゴザリテ。素ト勸導ノ心ノ切なる所カラ出タ事ニハ相違ナケレドモ。其制度ノ嚴酷ナル事実ニ堪ユベキニアラズ。例ノ所謂不羈ノ情ト權利トヲ束縛霸廢スル事。此上モナク甚ダシイ事デゴザルカラ、実ニ治安ノ上ニ於テ。尤モ害アル制度ト申スベキノデゴザル」(加藤 [1870])

〔下〕15～16丁。下線は原文のまま。一部当用漢字に改めた箇所がある。以下の引用も同じ。）

西周「社会党論ノ説」1878～79年頃

加藤弘之と同じ明六社の一員である西周は、以下のような理解であった。

「社会党論ト云フ者ニ至テハ総テ往古ヨリ西モ東モ有リ来リタル人間社会ヲ其目的ニ從テ变革セント欲スル者ニテ、是今次日耳曼〔ドイツ〕ニ起リタル^{ソシアリスト}公共党〔社会党〕露西亞ニ起リタル烏有党〔虚無党〕ノ如キ是也」(西〔1878～79〕420～421ページ。)

②マルクスの紹介 小崎弘道「近世社会党ノ原因ヲ論ズ」1881年

マルクスについては1881年、小崎弘道の「近世社会党ノ原因ヲ論ズ」という雑誌論文で、初めて日本に紹介されている。その紹介は以下のように、やはり好意をもった紹介ではなく、批判的である。この論文は、当時ドイツ等々で盛んになった社会主義あるいは社会（民主）党について、その発展の原因を探り、日本に波及しないようにするため、あるいは発生を未然に防ぐには、どうすればよいかが主題となっている。そして、社会主義とマルクスそれ自体については、次のように論じられている。

「社会党トハ社会説ヲ主張スル者ノ名称ニシテ、ソノ説タル第一ニ主義トスル所ハ社会各自ノ所有権ヲ廢止シ、之ヲ全社会ニ共有セシムルニ在リ。〔中略〕今独国社会党ノ首領ト称スベキ、カール・マルクス氏ガ唱スル所ヲ見ルニ、曰ク、現今社会貧富懸隔シテ困難アル原因ハ、所有権ノ法アルニヨル。所有権ノ法ハ、窃盜ノ方法ニシテ、資本主ハ不当ノ利益ヲ占メ、力役者ハ相当ノ報酬ヲ得ズ、之ヲ救ウノ道唯現在ノ所有権ノ法ヲ廢シ、新ニ社会法ヲ組織スルニアリト。」(明治文化研究会〔1969〕409ページ。)

このようにマルクスと社会主義を紹介している。つまり、①の明六社の紹介と理解把握でも言えることであるが、社会主義やマルクスの主張については、好意的な紹介でないことがすぐさま知れるのであるが、それはともかくおくとしても、それ以前に社会主義やマルクスに関してその主張を正確に理解して紹介しているとは言い難い。すべて所有や私有をなくすということで、マルクスあるいはその社会主義的な主張を把握しているのである⁽⁹⁾。

③当時の経済学教科書での社会主義の扱い

ここで視点を変え、当時の大学教育あるいは代表的な教科書で、社会主義あるいは社会主義思想はどのように扱われていたのか。この点に関して以下確認していきたい。

フォーセッ『初学者のための経済学』（永田健助訳述『宝氏経済学』）1870年

まずは、明治前半期（1870～80年代）の日本に最も広く普及し浸透した経済学教科書として、フォーセッ『初学者のための経済学』がある⁽¹⁰⁾。これには社会主義あ

るいは共産主義に関して、憎しみやあざけりの批評はなされていないが、経済上の難点といういくつかのコメントがなされている。

例えば、「共産主義の欠点／共産主義に体制に対して反対すべき多くの経済的難点がある。第一に利己心であって、努力するというあらゆる動機のうち最も強力なるもの、それが作動しないのである。そして、第二には将来に関して、思慮のなさや無謀さに対する既存の抑制がすべて引っ込められてしまうのである。共産主義社会のすべてのメンバーは、各々の仲間の労働者に対する高尚なる義務感によって行動させられることとなる。現行の物事の秩序では、貧しい人は彼自身および家族を持っているならば、家族を欠乏から救うために、一生懸命働かなければならない。いつか持つであろう次々と生まれる子供は、継続的な支出源であることを彼は知っている。したがって、努力と摂理に従うべき最も強力なる刺激が彼にはあるのである。しかし、共産主義社会にはそうした者は、精力的にかつ絶え間なく働こうと、あるいはゆっくりとまた不規則的に働こうと、彼と彼の家族がどんなに多くとも、扶養されるだろうと、彼は感じ取るだろう。また、彼自身死に備えることも全く不必要と感じるだろう。なぜならば、彼の家族が窮乏に迫られることなど、決してあり得ないからである。」(Fawcett [1870] pp.36～37.)

ミル『経済学原理』1848～71年

またこの時期の経済学の教科書として日本で広く使用されていたものに、ミルの『経済学原理』(日本語訳は林薫・鈴木重孝訳述『弥児経済論』1875年より)がある。その中において、社会主義や共産主義に対しては好意的ではないように読める。

例えば「もっとも一般的にいて、固定給をもって報酬する場合には、どの階級の職員も最大限の熱意をもって働かないものである。そしてこのことは共産主義社会の労働者に対しても合理的にいうるのである。」「この制度〔共産主義制度〕がもつところのもっと現実的な困難は、社会の労働を各成員に公平に割り当てることの困難である。」「すなわち一の社会制度としての共産主義は今日ただ概念上に存在するに過ぎず、今のところその能力よりもその困難の方がはるかによくわかっており、」(Mill [1848-71] Book II, Chapter I. / 訳本では〔二〕25～28ページ⁽¹¹⁾。)

と、このような評価をあたえ、そしてその後サン・シモン主義、フーリエ主義への言及となっている。

④在野の史論家・批評家、山路愛山の回顧

ここで同時期の在野あるいは市井の人々の反応を聞いてみたい。当時著名な史論家・批評家、山路愛山が当時を回顧して次のように言っている。

(樽井藤吉の東洋社会党の結成〔1882年〕を聞いて、)「是れより先き露帝の横死を伝聞

して虚無党の名を恐怖し、虚無党は社会党の一種なりと聞きて、何となく其名をも嫌悪したる我等は、日本にも亦此恐るべき馬鹿者の卵を生ぜんとしたるを聞きて甚しき不快を感じたるのみならず、かゝる党派の主唱者は恐らくは半狂乱人ならんと想像したりき。青年なる我等の心には実にしか思わざることを得ざりしなり」(山路 [1908] 374ページ。)

⑤ここまでのまとめ

社会主義や共産主義に対する理解・把握そして批判は、およそこうした類のものが主であったと考えられる。

以上の検討から、まず明六社の啓蒙思想家からはかような理解と紹介のされ方をされ、当時の代表的な経済学の教科書の記述を見ても、好意的な批評がなされていなかった。よって当時の大学出の知識人の理解把握あるいは在野の理解と解釈においても、社会主義思想に関しては好感を持っていなかったか、あるいは一種の理想としてとらえていたように伺い知ることができる。その後も社会主義・共産主義に対しては長く批判的に扱われ、これらを支持するものは久しく現れなかったようである⁽¹²⁾。

しかしこうした社会主義や共産主義に対する理解・把握は、現在から見るとマルクス主義的なものではなく、その批判すら妥当ではないと言える。いわばそうした批判は、むしろ空想的なユートピア思想、マルクス主義的な用語では「空想的社会主義」に向けられるべき批判であろう。この当時はまだ、マルクスの『資本論』が刊行されていたとはいえ、マルクス主義的な社会主義あるいは経済学は、日本にまだ正確に導入されていなかったのである。マルクスの名が日本の文献において既に見られるとしても、それは断片的なものであったり、また彼のいわゆる科学的社会主義に関してはかなり不十分な解釈と紹介であった。つまり、当時社会主義思想といっても、日本ではまだ様々なものが混在しており、その違いまで正確に検討されて記述されていたとは言えないのである⁽¹³⁾。もとより社会主義や共産主義に対して批判的な紹介が日本の場合なされていたことと合わせて、さらにその解釈と理解はかくの如きものであったことを承知しておくべきである。

⑥当時の社会政策学会の立場

さて、社会主義や共産主義に関する上記の状況と理解の中で、時代がもう少し下って、先のドイツ帰りの新進気鋭のインテリゲンチヤは社会主義に関してどのように見たのかに論題を進めていく。これに関して有名なものとして、日本の社会政策学会の設立趣意書(1899年)に次のようにある。

「余輩は社会主義に反対す何となれば現在の経済組織を破壊し資本家の絶滅を図るは国運の進歩に害あればなり余輩の主義する所は現在の私有的経済組織を維持し其範

圈内に於て箇人の活動と国家の権力とに由つて階級の軋轢を防ぎ社会の調和を期するところにあり此主義に本き内外の事例に徴し学理に照らし社会問題を講究するは実に
是れ本会の目的なり此に趣意書を草して江湖の諸君子に告ぐ」(社会政策学会 [1899]
105～106ページ⁽¹⁴⁾。)

本稿で示した①から⑤の理解を受けてか、このとおり当時の日本の経済学の泰斗であった社会政策学会は、自由主義思想と同じく、社会主義思想に対しても完全に反対の立場を取ったのである。すでにこの頃は、既述のとおり徐々に社会運動・労働運動が盛んになってきたことや、また既述の様々な社会主義思想が導入され活発になってきていた。社会政策学会の者たちは当然ドイツにおける社会主義思想（それもマルクス主義的なもの）の発展を、そして社会民主党の発展を目の当たりにして知っていたはずである。しかし、日本においてもドイツと同様、社会政策学会は自由放任主義とともに、社会主義学派ともまさに両面で対峙していく方針を取ったわけである⁽¹⁵⁾。

またこの時期の政治・法制上の特記事項として、台頭してきた社会主義的な労働運動・農民運動を抑えるため、警察権の拡大強化を計った治安警察法が1900年に制定されている。

3. マルクス主義（科学的社会主義）の導入とその要因

①マルクス主義の研究・活動の発展

以上前節までで、明治維新後のおおよそ経済学の導入、具体的には古典学派から歴史学派への導入の変遷、その過程における労働問題・社会問題の発生、日本の社会政策学会の設立、社会主義思想の萌芽や導入、その反応と批判、これら一連の過程と状況を見てきた。そして、社会問題あるいは社会主義に関する研究会・団体が創設され出すのが、およそ1890年代、それも特に1890年代の後半であった。やがてこれ以降、上記のように1900年に治安警察法が制定されながらも、しかし日本の社会主義に関する研究・活動は一時大いに盛んになる。まずここに着目したい。

その中で特筆すべきものを歴史的に追いながら確認していくとすれば、次のとおりである。(本稿51ページからの「関連年表」も参照。) まずすでに述べたが、従来の社会主義研究会が1900年に社会主義協会となる。翌1901年、社会民主党が結成。同年、幸徳秋水の『帝国主義』が発刊。続いて1903年に幸徳秋水の『社会主義神髓』、堺利彦の『我社会主義』が発刊。翌1904年、マルクスの『経済学批判』が幸徳秋水と堺利彦とによって邦訳。1906年にエンゲルスの『空想から科学への社会主義の発展』が堺利彦によって邦訳。同年、日本社会党が正式に認知。翌1907年に堺利彦・森近運平による『社会主義要綱』が発刊。1909年5月から『社会新聞』に森近運平による『資本論』（部分訳）が掲載。

さらにこの他にも、1904～05年の日露戦争に際して、幸徳秋水・堺利彦が『平民新聞』紙上で社会主義の立場から反戦を唱える執筆活動を行なったのはよく知られている。このように社会主義が運動とともに、単なる文献研究の翻訳紹介から次第に研究へと大いに発展し出したのである。同時にこの時期、いよいよマルクスの思想、マルクス主義、あるいはマルクス経済学が、徐々にそして大いに導入されてくる。(しかし、やがてこうした社会主義的な活動・運動は、もう少し年代を進めていくと、1910年の大逆事件で頓挫する。再び息を吹き返すのは、ロシア革命〔1917年〕以降である。このロシア革命を受けて、その後の1910年代後半から1920年代にかけて、マルクス経済学の翻訳および研究がさらに進展していき、それがやがて日本資本主義論争へとつながっていくのであるが、本小稿ではそこまでは捉えきれない。)

このようにマルクス主義・マルクス経済学が日本に入ってきたのは、上記の文献研究で見る限り、20世紀になってからのことである。ここにおいて、本稿で第二の対象課題として明らかにしていきたいのは、本稿の開題でも課題としたように、マルクス主義・マルクス経済学が導入されるこの時期、当時の代表的な社会主義者がマルクス主義・マルクス経済学をどのように見ていたのか、という点である。まずこの時期の代表的な社会主義者がなぜ社会主義思想に駆られたのかという問題に関しては、既に先行研究がある⁽¹⁶⁾。それに関しては本稿でも、資本主義化に伴う社会問題・労働問題といった社会情勢の変化をすでに指摘しておいた。それを押さえた上で、さらに進めて本稿で解明していく対象課題は、そうした社会主義思想の中で、なぜマルクス主義的なもの、またマルクス経済学が盛んに導入されてきたのかという点である。

この点に関して、時代と出版をもう少し詳細にかつ具体的に確認していくこととする。幸徳秋水が1901年、すでにカウツキーやレーニンに先立つこと十数年早く、『帝国主義』を出版したことはよく知られている。この『帝国主義』によると、もはや世界的に軍事力で自国の領土・勢力を拡張していこうとする帝国主義的な政策が、まさに燎原の火のように広まっている。日本はそれに愛国心と軍国主義的な側面からも加担しようとしている。そうした動きは略奪に等しいものである。およそこうした観点から、幸徳秋水は帝国主義政策を批判し、対して国際的な社会主義建設を行なうことでその対策と運動を訴えている。しかしその中では、こうした段階にまで発展した経済学的な視点・分析は少ないし、「科学的社会主義」なる言葉は出て来るもののマルクスの名は一度しか見当たらない。(以上、幸徳秋水全集編集委員会 [1968a]。)

しかし、二年後の1903年に刊行された『社会主義神髓』では、一読してかなりマルクス主義的な立場に立っていることが解る。その『社会主義神髓』では、唯物史観から説き起こして、労働、価値、資本、階級、生産過剰、等々が論説されており、『帝国主義』の時期とはかなり違って、明らかにマルクス主義あるいはマルクス経済学にかなりのほど依拠しているのである。それもそのはずであり、参照した文献として序

文において、『共産党宣言』『資本論』『空想から科学へ』が筆頭に挙げられている。
(ただしいずれも英語版。以上、幸徳秋水全集編集委員会 [1968b]。)

この『社会主義神髄』はかなりの売れ行きを示し、この書物によって、日本にマルクス主義的ないわゆる科学的社会主義の思想の紹介・普及が進んだのである⁽¹⁷⁾。このように、前節で確認したとおり今までたいして知られていなかったマルクス経済学を含めたマルクス主義の思想が、この幸徳秋水の『社会主義神髄』刊行以降、盛んに導入され出すのである。

この時代の社会主義者は一体マルクス主義の思想或いはマルクス経済学のどの点に駆られたのであろうか。あるいは同義だが、マルクス主義思想・マルクス経済学のどの点が、かの者たちを引き付けていったのであろうか。

②幸徳秋水「社会主義に対する誤解」1901年

それについて、行論の関係と紙幅の都合上、幸徳秋水に絞って検討していった方が解りやすくなるであろう。そこで、先ほどの『帝国主義』(1901年)から『社会主義神髄』(1903年)に至る幸徳秋水の執筆の中で、マルクス・エンゲルスに関して触れたものを逐一見ていくこととする。『帝国主義』(1901年)の刊行の後、マルクス・エンゲルスについて初めて記述している幸徳秋水の文献は、1902年の「社会主義に対する誤解」というものである。その中で彼は次のように述べている。

「近世社会主義に対する誤解甚だ多し。

近世社会主義を以て、サンシモン、フーリエ等の^{ユートピア}空想と同一なりと為すは、是れ大なる誤解也、[中略] 彼等「近世社会主義者」は生物に於けるダルウキニズムを信奉すると同じく、社会に於ける進化の理法を信奉す、彼等は決して一定不変のユートピア的世界の模型を製造して、現在社会を以て直に此模型中に詰込[ま]んとするに非ずして、進化の理法を円融に流行せしめんとする者也、マークス及びエンゲル[ス]の所見を読めるの人は、如何に社会の歴史が、万古不易の深化の理法に支配されて、発達し来たり発達行けるの外なきことをしらん、[中略] 是れ空想に非ずして科学也、」
(幸徳秋水全集編集委員会 [1968b] 161ページ。)

②幸徳秋水「社会主義と宗教」1903年

次に1903年、幸徳秋水の「社会主義と宗教」という論文の中で、マルクスに関して次のように論じられている。

「所謂『近世社会主義』一名『科学的社會主義』の学説の系統は、実に其源をヘーゲルの哲学に発して、ダルキンの進化説に養[わ]れ、そしてカールマルクスの物質的経済説に至つて、始めて大成せられたもので、或宗教の特産物でもなければ附屬物でもない」(幸徳秋水全集編集委員会 [1968b] 391ページ。)

③幸徳秋水「社会問題の帰趣」1903年

さらに同1903年、「社会問題の帰趣」において、次のように論じている。

「人の生まれて地に落つ先づ發するの呱々即ち乳を求るの声である、所詮人間第一着の問題は即ち衣食の問題である、カールマルクス曰く『有史以来一切の社会組織なる者は経済上の生死及分配の方法が、之が基礎たるものである、政治や学芸や其外インテレクチユアルの歴史は皆な此の基礎の上に建ち、唯た此基礎よりして初めて解釈し得るのである』と、果して然れば現在将来の社会問題の解決に任する者の緊要事は、先づ此基礎の如何を講究するに在らねばならぬ、換言すれば現在の生産分配の方法は果たして如何の状であるか、その将来は果して如何にあるべきか、あらしむべきかを見なければならぬ。」

さらにこの論文ではこれに続けて、共産制・奴隸制・封建性・現時の資本家制度と、歴史を大別し、以下これらの転換に経済の果たした役割に触れている。こうしてまさにマルクス主義の唯物史観に則って説明を行なっている。続いて、資本の集中、独占、競争、恐慌に触れ、現在の資本主義から社会主義へと、かつ生産手段を資本家の占有から社会公共へと移すことを主張し、最後に「社会主義の希望は、空想でも希望でもない、夢望でもない、古来歴史の進化する所以の理法は現時の社会が到底之に帰着する者なることを示して居る、之に忤ふ者は亡び、之に順ふ者は昌ふ、予は将来の社会問題解決に任する者は、一に此方針に従ふの外なきを信するのである。」このように結んでいる。(以上、幸徳秋水全集編集委員会 [1968b] 405～414ページ。傍点は原文。)

この後、社会主義に関する幸徳秋水の紹介や主張は、先ほどの『社会主義神髓』(1903年)につながっていくのである。

④マルクス主義の影響

以上見てきた幸徳秋水の著作から、およそ以下の論定が可能であると筆者(深澤)は考える。

かつて社会主義あるいはまたその思想は、ある種人道主義的な考えから発し、ここでは社会構造・経済構造の分析を持ち合わせず、また現在の体制から社会主義へと移行させる明確な道筋も持たず、ユートピア的なものと言われてもいたしかたないものであった。これらは本稿の2でもおよそ確認できた。しかし、様々な社会主義思想の中でマルクス・エンゲルスの思想体系は他のものとは違っていた。幸徳秋水にとって、1901年の『帝国主義』以前に、マルクス・エンゲルスに関して言及したものは見当たらない。しかしそれ以降、幸徳秋水はマルクス・エンゲルスの「科学的社會主義」の思想を知り、そしてそれを深く研究するようになったことが上記の著作内容の進展から明確である。実際に、1903年から既述のとおり、『共産党宣言』『資本論』『空想

から科学へ』などのマルクス・エンゲルの文献が和訳出版されていくのである。

さらに幸徳秋水の既述の論述内容から、マルクス・エンゲルスに関する幸徳秋水の認識をたどれば、さらに以下の論定が可能である。マルクス・エンゲルスの「科学的社会主義」の思想は、従来の空想的な社会主義のものとはかなり違っていたと上記既に示したが、そのさらなる具体的内容を提示していくと次のとおりである。まず、全く観念論的なものではなく、唯物論や唯物弁証法を根底に置き、それを歴史に適用させて捉えていくという唯物史観（史的唯物論）といった観点をを用いていること。さらにそれによって有史以来を把握していること。つまりは、時代や社会の変化・発展の根底に経済を置き、歴史的な変化・発展を経済のそれに求めている。そこから現在の資本主義体制からの変化・発展も示され得る。こうした観点を基礎に、マルクス主義は経済分析も行なっている。そこでは、労働から論点を説き起こし、価値へと、そして競争から集中・独占へと、あるいは恐慌現象の解明をも取り入れ、それらを論理的に一定の連関性の下、体系的に進展させている。

その中で、マルクス主義においては社会主義への移行・発展に関しても、思想的あるいは科学的に根拠づけられて主張されている。競争から恐慌、そして集中や独占の成立を通じて、経済社会の根本と見られるところの生産手段を、資本家の占有から社会全般の公有に移すことで、社会主義の理念にかない、貧困、社会問題、労働問題、などの当時の諸問題が解決できる。このようにして、マルクス主義が持っている上記既述の思想的・論理的体系性の上に、さらに社会主義への移行に関しても、かような明確なプランを持ち合わせている、このようマルクス・エンゲルスの思想を幸徳秋水はこの時期知ようになったのである。

それがまた、先の唯物史観と唯物弁証法に基づいて、資本主義から社会主義への移行は、あたかもダーウィンの進化論のように、社会・歴史の法則に則っているとされ、進化の理法だと把握されている。資本主義から社会主義への移行はこのようにして必然的であって、まさに科学的根拠に裏付けられていると幸徳秋水らは認識把握したのである⁽¹⁸⁾。

マルクス主義の思想や理論に対するその妥当性、その当否・是非、あるいは支持賛否は、ここではおいておく。ともかくも、こうしたマルクス・エンゲルスの思想や理論が、従来の他のいわゆる空想的な社会主義論とは違って、哲学・歴史学・経済学等を併せ持った一貫した体系性の上に、一つの科学として打ち出されている点を、幸徳秋水らは重要視したのである。それに彼ら社会主義者は、いわば勇気づけられ、魅了されていったと、以上の考察から論定できよう。これが当時の社会主義者（ここでは幸徳秋水）たちがマルクス主義、つまり彼らの言葉では「科学的社会主義」に引き付けられた主要因であると考ええる。

⑤宇野弘蔵による回顧

社会主義をこのように科学的見地から見定めていこうとする見解や立場は、マルクス主義の大きな特色であり特長でもあって、幸徳秋水に限らずその他多くの者を引き付けている。幸徳秋水の『社会主義神髓』（1903年）から10年ほど時代は下るが、日本の有名なマルクス経済学者である宇野弘蔵（1897～1977年）も当時を回顧して次のように言っている。

「私は偶然のことからそれまで不逞無頼の徒の主張とばかり思いこんでいた社会主義が決してそういうものではないことを知りました。特に大正四、五〔1915、6〕年以後になると主として山川均氏の論文によるのですが、それは当時東京大学の先生だった吉野作造氏の主張などとは比較にならないほど筋の通ったものであることを知ることになったのです。そしてその背後にはマルクスという偉大なる社会主義者の『資本論』という著作のあることをも教えられたのでした。私はその時以来なんとかしてこの『資本論』が読めるようになりたいと考えるようになったのです。」（宇野〔1974〕99～100ページ。）

⑥ここまでの整理・要約

ここで以下のように二点に整理・要約したい。一つ目として、マルクス主義が打ち出した社会主義思想に対する科学的性格あるいは科学的根拠、そして二つ目として、その主張・分析を裏付けるべくなされる『資本論』等々のいわゆるマルクス経済学による分析とその体系性、これらが当時の社会主義者等々を魅了し引き付けた主要な要因であると考えられる⁽¹⁹⁾。これによって、この時期以降、幸徳秋水らの社会主義者によって盛んにマルクス主義あるいはマルクス経済学が導入されてきたものと、考えられるのである。

終わりに

本稿は特に日本にマルクス主義、あるいは科学的社会主義が初めて導入され出す時点に、対象を絞り見てきた。日本が資本主義の道を辿っていくにしたがって、いくつかの労働問題・社会問題が発生し、明治維新・文明開化以来の社会主義思想に対する理解と主張から脱皮した、空想的でない思想がマルクス主義にあることがこの時知られるようになった。それらを幸徳秋水に代表させて、彼の言説から確認してきた。その要点は上記にまとめ上げたので、改めて繰り返す必要はないであろう。

やがてこの後、マルクス主義・科学的社会主義に関する文献の翻訳と研究が、既述のとおり一時盛んとなる。ただし、当時のマルクス経済学の研究はまだいかにせん途に就いたばかりであった⁽²⁰⁾。マルクス経済学の本格的な導入はその後、1917年

のロシア革命を経た後、そこでマルクス主義（科学的社会主義）の思想と主張が机上のものではなく、現実に応用されたことによって、再び活発になっていき、やがて日本では1920年代の日本資本主義論争他、いくつかの論争を迎えていく。

幸徳秋水らのそこまでの動きを確認して本稿を閉じていくとすれば、以下のとおりとなる。堺利彦・片山潜らが1906年結党した日本社会党は1907年2月に結社を禁止。幸徳秋水は1905年の年末アメリカに渡る。帰国後、彼は自身で言う「思想の変化」から無政府主義的な考えを打ち出し、当時の社会主義のメンバーには分裂が生じる。やがてその後、1910年の大逆事件で幸徳秋水らは死刑となり、社会主義運動はいわゆる「冬の時代」を迎える。

それをいわば溶かしていったのは、上記のとおり大正期（1912年～）のデモクラシー運動であり、先のロシア革命であり、また米騒動などの動きであった。これらを背景にして、上記のとおり、マルクス経済学の本格的な導入と活性化につながっていく。訳本の刊行を見れば、1919年に『資本論』の翻訳が松浦要訳と生田長江訳の二つが刊行。同年、『賃金・価格および利潤』の松浦要・山川均訳が出る。さらに同年、河上肇による『賃労働と資本』の訳がなされる。そして1920年、マルクスの全集の訳業が山本義人や高畠素之によってなされていく。

本稿はそうした動きのいわば前史、しかし重要な黎明期を確認してきたわけである。

注

- (1) 例えば、都留 [1974] には次のようにある。「近代経済学 [英 modern economics] は1870年代のはじめ、ドイツ（オーストリア）ではメンガーが、フランスではワルラスが、イギリスではジェボンズまたはマーシャルが、ほとんど時を同じくしてまったく別々に限界分析と極大原理という分析方法をもとに、あらたな効用による消費行動の理論をとりいれた新しい経済学を提出した。この時以後、経済学は大きく屈折するが、こうして発展していく経済学を総称して（古典学派およびマルクス経済学派と区別して）、日本では通常近代経済学という。ただし欧米では、日本のように古典派研究もマルクス経済学も盛んではないため、こうした総括的名称を必要とせず、マルクス経済学と区別して、academic economicsとか、orthodox theoryとかいうときはあっても、modern economicsというときは、単に最近の経済学という意味にすぎない。」（都留 [1974] 50ページ。）

このような「近代経済学」という名称に関する特殊性を詳細に指摘している文献としては、早坂 [1974] 8ページを参照。そこには「近代経済学」という名称に関しては、「国際的通用性をもたない用語法」とある。（早坂 [1974] 6ページ。）

これらの点を重視して、本稿では「近代経済学」と、括弧を付して表記した。

- (2) 大内 [1959]（上）第六章、また同書（下）455ページ。
(3) こうした指摘は例えば、伊東 [1984] 179ページ。
(4) これらの詳細に関しては深澤 [2017] でも示しているので、参照されたい。
(5) 一例を挙げるなら、エコノミスト編集部 [1970]（上、近代経済学編）を参照。

- (6) これに関しては、早坂 [1982] 133ページ、あるいは真実 [1974] において、当時を回顧して、世界的には経済学史研究の水準が高いにもかかわらず、日本経済学史の研究は精彩を欠いており、その匡正が今なお遅々としている現状が言われている。
- (7) これに関する本文以下の論述については、数々の文献を参考にした。その中で通史的なもので代表的なものを列挙するとすれば、次のとおりである。日高ほか [1967]、長・住谷 [1969・71]、玉野井 [1971]、杉原・長 [1979]、経済学史学会 [1984]、モーリス・鈴木（藤井訳）[1991]、など。
- (8) この分類は、坂本武人氏の指摘による。坂本 [1972] 17ページを参照。
- (9) 後の注の(13)も参照。なお、この後マルクスに関しては次の文献で取り上げられ、「科学的社会主義」なる語は頻繁に用いられ出す。草鹿 [1893]、民友社 [1893]、グラハム（森山訳）[1894]、田島 [1897]、藤井 [1897]、村井 [1899]、片山 [1901]、西川 [1902]。これらの文献の詳しい詳解と検討に関しては、筆者の別稿を期したい。これらの文献の後、幸徳秋水・堺利彦らによるマルクス主義（科学的社会主義）の紹介研究につながっていくのであるが、この点については本稿の研究対象であって、本文で詳細に触れていく。
- (10) なおこの書物は、永田健助訳述『宝氏経済学』などとして1870年以降訳されている。この点、長・住谷 [1969] 139ページを参照。しかし、どうも原文との異同が見られる。よって本文は筆者（深澤）が原典にあたりそれを訳したものである。
- (11) ただし、ミルの同書は1848年の第1版から、1871年の第7版までである。本文で引用した和訳本は第7版であるが、版によって社会主義思想に対してかなり評価が違っているのに注意したい。この点に関しては、藤本 [1989] を参照。
- (12) この指摘も、坂本武人氏に拠る。坂本 [1972] 19ページ。
- (13) 大河内 [1963] 17ページにも次のようにある。「当時日本で『社会主義』と呼ばれたものは、必ずしも明確な統一的な内容や体系のある思想ではなく、ある場合には、サン・シモンやシャルル・フーリエのような『空想的社会主義』の思想であり、またある場合にはマルクスが、他の場合にはラサールが、代表的『社会主義者』の思想であり、またブルードンやパークンのようなアナキストと『社会主義者』が同一視され、あるいはまたヘンリー・ジョージのような土地改良論者が、またしばしば博愛主義者や人道主義者やトルストイ的無抵抗主義者までが、『社会主義者』の仲間入りをさせられていた。」またマルクス主義導入時以前の社会主義に関する詳しい文献整理と紹介は、明治文化研究会 [1993b] の西田長壽「改題」を参照。そこでは上記大河内と同様な指摘がなされている。
- (14) 社会政策学会資料集成編纂委員会 [1978] 37～38ページからの引用。
- (15) その社会政策学会の設立趣意書に対して、社会主義的立場から安部磯雄が、そして自由主義者の田口卯吉が、それぞれ批判を提起している。これについては飯田 [1984] 63ページ以降に詳しい。注意しておきたいのは、このように社会政策学会の趣意書が上記のものであったとしても、当学会に名を連ねた者たちは思想や立場的に様々であり、皆が社会主義の思想に徹頭徹尾反対していたのではない点である。この点に関しても飯田 [1984] 66ページ以降に詳しい。
- (16) 例えば、坂本 [1972] 76ページ以下、山泉 [1990] 88～126ページ。
- (17) 岩波書店版の『社会主義神髓』の平野義太郎の「改題」には次のようにある。「『社会主

義神髓』は明治三十六年（千九百三年）七月刊行され、すでに同年十一月までに六版を重ね明治三十八年に七版を出したほど普及されたもので、いご社会主義にかんする宝典となった。終戦後にも新しく四種の版本が出た。[中略] 日本人の手で、これだけまとめたものが、ほかになかったという点でも、日本の青年に耽読されてきたものである。」（平野 [1952] 87 ページ。）

また、金子ほか83名 [1903～04]「予は如何にして社会主義者となりしか」においても、感化された文献として幸徳秋水の『社会主義神髓』を挙げる者が一番多い。

- (18) こうした筆者の論定に関して、山路愛山の次の言明が明確な証左となる。「当時 [1905年頃] 堺、幸徳の二氏は漸くカール・マルクスの甘みを覚え、其経済的宿命論歴史的唯物論に感化せられ、天地の間此外に心理なしとまで心酔したるもの、如く」（山路 [1908] 390～391ページ。）これから幸徳秋水らが、いかに唯物史観（経済的宿命論歴史的唯物論）に傾倒していたのかが知れる。

- (19) マルクス主義があるいはマルクス主義が持つ経済学的体系性と言ったが、これについては以下の陳述が大いに参考になる。有沢広巳（1896～1988年）は1973年に回顧して以下のように言っている。

「ぼくがマルクスに飛びついたのは、経済学部を出て助手になって、経済学を本格的に勉強しはじめたとき [1922～23年頃か] だったといつてよいでしょう。むろんそれまでの前史はありますが。その当時の日本の経済学は、歴史学派だとか古典学派だとか、オーストリア学派などの学派の寄集めで、学問としては体系性がなかった。たとえば、分配論は古典学派によるが価格論はオーストリア学派からとるといった、雑炊的な経済学になっていた。つまり内部構造のない体系だった。ですから、これでは経済学は成りたたないと考えた。これは私一人ではなくて、私といっしょに大学に残った大森義太郎にしても、みんなそうであった。[中略]

実は、初め私は限界効用学説をやった。それは私の先生のレーデラーがオーストリア学派の先生だったということもありますが、その講義をきいていても、どうしても学説体系として一貫した説明がつかないところがある。レーデラー先生に質問してみても、先生もそれが問題だという。そこで、まえまえから多少見当をつけていた『資本論』に取り組むことにした。[中略]

マルクス経済学をひとわり学んだのちに、日本の経済現象を考えると、非常によくわかる。彼のいうとおりのような形にできている。ことに農業問題なんかそうですね。」（有沢・玉野井 [1973] 95～96ページ。また稲田・岡本・早坂 [1974] 22ページも参照した。）

さらに、これとほぼ同様の指摘を、杉本栄一（1901～1952年）も行なっている。

「わが国では、古典学派でも、歴史学派でも、オーストリア学派でも、一つの学派として纏まった形で支持されるに至らず、甲の部分からは価値論が、乙の学派からは地代論が、丙の学派からは発展理論がというように、部分理論として手当たり次第に輸入され、いわば寄せ木細工のように補綴されただけでした。[中略]

ところが [中略] マルクス学説だけは、その趣が全く違っていました。マルクス学派は、それ自体纏まった理論体系として輸入されたのです。」（杉本 [1981] [上] 52～53ページ。）

- (20) マルクス経済学でよく用いられるドイツ語の Value という語に関しても、当時はまだ価値

と価格の区別が曖昧だったとよく言われている。(日高ほか [1967][上] 66ページ。)しかし、これについて筆者(深澤)はいささか異論がある。詳細な検討は別稿を期したい。

参考文献

- 有沢広巳・玉野井芳郎 [1973]『近代日本を考える』東洋経済新報社。
- 飯田鼎 [1984]「日本社会政策学会と経済学研究」(経済学史学会編 [1984]『日本の経済学』東洋経済新報社)。
- 伊東光晴 [1984]「戦後の近代経済学」(経済学史学会編 [1984]『日本の経済学』東洋経済新報社)。
- ウィリアム・グラハム (森山信規訳) [1894]『新旧社会主義』博文社。
- 宇野弘蔵 [1974]『資本論の経済学』(宇野弘蔵 [1974]『宇野弘蔵著作集』第六巻、岩波書店)。
- エコノミスト編集部編 [1970]『戦後日本経済研究の成果と展望』(上・下) 毎日新聞社。
- 大内兵衛 [1959]『経済学五十年』(上・下) 東京大学出版会。
- 大河内一男 [1963]「解説 日本の『社会主義』」(大河内一男編集 [1963]『社会主義』「現代日本思想大系15」 筑摩書房)。
- 片山潜 [1901]「『ダスカピタル』と其著者マルクスの地位」(『六号雑誌』243号、1901年3月号)。
- 加藤弘之 [1870]『真政大意』(上・下) 明治大学図書館蔵。
- 金子喜一ほか83名 [1903~04]「予は如何にして社会主義者となりしか」『平民新聞』第二号、1903年11月22日号より掲載(後に山泉進 [1990]『社会主義事始』「思想の海へ [解放と変革] ⑧」 社会評論社に所収)。
- 草鹿丁卯次郎 [1893]「史伝『カル、マルックス』 Kare Marx」(『国家学会雑誌』第6巻、第72・74号、1893年7・9月号)。
- 幸徳秋水 [1901]『廿世紀之怪物帝国主義』警醒社(後に1952年に岩波書店から『帝国主義』として出版、また幸徳秋水全集編集委員会 [1968a]『幸徳秋水全集』第三巻、明治文献、に所収)。
- [1903a]「社会主義に対する誤解」(原典は『労働世界』7巻1号 [1903年1月1日]、後に幸徳秋水全集編集委員会 [1968b]『幸徳秋水全集』第四巻、明治文献、に所収)。
- [1903b]「社会主義と宗教」(原典は『日本人』185号 [1903年4月20日]、後に幸徳秋水全集編集委員会 [1968b]『幸徳秋水全集』第四巻、明治文献、に所収)。
- [1903c]「社会問題の帰趣」(原典は『中央公論』18巻3号 [1903年5月10日号]、後に幸徳秋水全集編集委員会 [1968b]『幸徳秋水全集』第四巻、明治文献、に所収)。
- [1903d]『社会主義神髓』朝報社(後に1953年に岩波書店から出版、また幸徳秋水全集編集委員会 [1968b]『幸徳秋水全集』第四巻、明治文献、に所収)。
- 小崎弘道 [1881]「近世社会党ノ原因ヲ論ズ」(原典は『六合雑誌』第7号、後に明治文化研究会編輯 [1969]『明治文化全集』第六巻、社会篇、日本評論社〔第三版〕に所収)。
- 坂本武人 [1972]『幸徳秋水』清水書院。
- 社会政策学会資料集成編纂委員会編著 [1978]『社会政策学会史料』「社会政策学会史料集成(復刻版)」別巻1、御茶の水書房(原典は「社会政策学会」『国家学会雑誌』第13巻150号、1899年8月号)。

- 杉原四郎・長幸男 [1979]『日本経済思想史読本』東洋経済新報社。
- 杉本栄一 [1981]『近代経済学の解明』(上・下) 岩波書店。
- 田嶋錦治 [1897]『日本現時の社会問題』東華堂。
- 玉野井芳郎 [1971]『日本の経済学』中央公論社。
- 長幸男・住谷一彦 [1969・71]『近代日本経済思想史』(Ⅰ・Ⅱ) 有斐閣。
- 都留重人編 [1974]『岩波小辞典 経済学』岩波書店 (第4版)。
- テッサ・モーリス - 鈴木 (藤井隆至訳) [1991]『日本の経済思想』岩波書店。
- 西周 [1878~79年頃と推測]「社会党論ノ説」(大久保利謙編 [1961]『西周全集』第三卷、宗高書房)。
- 西川光次郎 [1902]『人道の戦士、社会主義の父、カール・マルクス』中庸堂。
- 早坂忠 [1974]『『近代経済学』とは何か』(稲田献一・岡本哲治・早坂忠編 [1974]『近代経済学再考』有斐閣)。
- [1982]「日本経済学史」(日本経済学界連合会編 [1982]『経済学の動向』〔第2集〕東洋経済新報社)。
- 日高晋ほか [1967]『日本のマルクス経済学』(上・下) 青木書店。
- 平野義太郎 [1952]「改題」(幸徳秋水 [1952]『社会主義神髓』岩波書店)。
- 深澤竜人 [2017]「二つの経済学の相克と経済学学習の指針—マルクス経済学と「限界革命」Ⅱ—」(『山梨学院生涯学習センター紀要』第21号)。
- 藤井準造 [1897]『近世社会主義』有斐閣。
- 藤本義昭 [1989]「ミル, J.S. 経済学原理」(林直道 [1989]『経済学名著106選』青木書店)。
- 細井和喜蔵 [1954]『女工哀史』岩波書店 (初出公刊は1925年、改造社より)。
- 真実一男 [1974]「日本の経済学史」(日本経済学連合会編 [1974]『経済学の動向』〔上〕東洋経済学新報社、第九章)。
- 民友社編 [1893]『現時之社会主義』民友社。
- 村井知至 [1899]「カール・マルクスの社会主義」(『六号雑誌』221号、1899年5月号)。
- 明治文化研究会編集 [1993b]『明治文化全集』第二十三卷、社会篇 (下巻)、日本評論社 (復刻版)。
- 山路愛山 [1908]「現時の社会問題及び社会主義者」(原典は『独立評論』第3号、1908年5月、後に明治文化研究会編集 [1993a]『明治文化全集』第二十二卷、社会篇〔上巻〕、日本評論社〔復刻版〕、に所収)。
- 横山源之助 [1949]『日本の下層社会』岩波書店 (初出公刊は1899年、教文館より)。
- John Stuart Mill [1848~71] *Principles of Political Economy, with Some of Their Applications to Social Philosophy*. 2 vols. London, John W. Parker, West Strard. 末永茂喜訳 [1960]『経済学原理』(一~五) 岩波書店。
- Millicent Garrett Fawcett [1870] *Political Economy for Beginners*, London and Kenbridge, Macmillan.